放送大学研究年報　第34号（2016）93-108頁
Journal of The Open University of Japan, No. 34（2016）pp. 93-108

グリャーニエ（民衆遊歩）の発見――ソビエト末期におけるロシア民衆文化史研究の始まり

坂　内　徳　明[1)]

A. Konechnyi's works on Pre-revolutionary Popular Fairs and Amusements—One of the First Researches of Russian Cultural Studies in the Last Period of Soviet Regime

Tokuaki BANNAI

要　旨

“ナロードノエ・グリャーニエ”（ロシア語でнародное гулянье）は、現代でも祭日の広場や公園、メインストリートなどで広く見られる現象だが、ロシア文化史上では、主に革命前ロシアの都市の広場や通り、場合によっては河の氷上で繰り広げられた民衆的祝祭を意味する。この祝祭の時空間は多面的な要素から成っているため、その十全な考察には、歴史学、演劇学、芸術学、民族学、民俗学、社会学などの学際的・統合的なアプローチが不可欠である。しかしながら、ソビエト時代にはまったくと言ってよいほどこの分野の研究は行われなかった。その理由は、第一に、祝祭・見世物研究の分野が、科学アカデミー傘下の研究所が主導する既成の学問領域区分の枠内に収まらなかったからである。そして、第二に、革命前の遊戯・娯楽がソビエト体制下の「健全な労働」観と真正面から対立し、その分野の研究に対する偏見とタブー視が強かった点にあると考えられる。

こうしたソビエト末期のアカデミズムの状況下、アルビン・M・コネーチヌィはほとんど孤立した状態で、自身の知的蓄積と見識のみを頼りにこの文化現象を正面から取り上げた。彼は数少ない“脱ジャンル的な”基本文献を「再確認」し、それを含む多くのテクストを新たな視点から読み直しただけでなく、多数の未知・未使用の資料を発見・検証することで、この分野の基本的な枠組みとその広がりを確実なものとした。その証拠となるのが1984年11月に開催された《ペテルブルクのナロードノエ・グリャーニエ》展であり、長年の研究成果である秀逸な書誌『18～20世紀初頭サンクト・ペテルブルク－ペトログラードの習俗と見世物文化』（1997）である。本稿では、彼の最新の未発表論文をもとに、彼が組織した展覧会開催までの具体的プロセスを考察し、そこにソビエト末期における庶民娯楽・祝祭文化史研究の起点を指摘するとともに彼の仕事の現代的意味について記述する。

ABSTRACT

In the Soviet studies on Russian cultural history, popular fairs such as a variety of games, amusements and leisure in the pre-revolutionary era were one of the most important aspects of Russian culture. However, it had hardly been researched primarily because of many taboos of “Academism” in Soviet Humanities, although cultural models concerning to festivals and playing had been offered by M.M.Bakhtin, Yu.M.Lotman, and so forth. Especially the Russian popular fairs called *narodnoe gulyan'e* which were the main entertainment in pre-revolutionary Russian cities, particularly for St.Petersburg's citizens, had been absolutely without due care and attention. In this context Al'bin M. Konechnyi's studies from the early 1980s were exceptional, fundamental and epoch-making.

The exhibition《*Narodnoe gulyan'e* and amusements in St.Petersburg on Carnival and Easter weeks》in November 1984 in the Museum of History of Leningrad, which was organized by Konechnyi, caused the great “scandal” in the Soviet academic sphere and society, resulting in “pros and cons”. Based on his unpublished article “How it all started?”, the process of difficult and elaborate organization of this display and public reactions are described in details in this article. He explains in this article that his academic standpoints have been based on discoveries by painstaking works and reconstructions of “missing link” texts. It would appear that this new academic movement, though fledging, might contribute significantly the post-soviet cultural studies.

[1)] 放送大学東京多摩学習センター　所長

目次

Ⅰ．ナロードノエ・グリャーニエとは何か
Ⅱ．研究着手
Ⅲ．展覧会の決断
Ⅳ．《グリャーニエと娯楽》展
Ⅴ．反響
Ⅵ．むすび

Ⅰ．ナロードノエ・グリャーニエとは何か

ロシア語で《народное гуляньеナロードノエ・グリャーニエ》と呼ばれる現象がある。これは現代でも、祭や行事の時に、都市や農村のメインストリートや広場・パークなどで繰り広げられる祝祭と娯楽を意味する。言葉を見れば、ナロードノエは「民衆的」、グリャーニエは、もともとロシア語の動詞グリャーチ гулять（散歩する、屋外へ出る）から派生したことから、野外散策を中心とした庶民の集団による自由・気ままな時空間の過ごし方、英語のfair（あるいはopen door party）、日本語に逐語訳すれば「民衆遊歩」とでも表現される文化現象である。その起源の詳細は不明だが、歌垣風の祭り、人々の集まりとそこで行われる娯楽総体とも考えられ、自然発生的と言わざるを得ない部分が大きい。明確な「プログラム」や「文法」にもとづいておこなわれる人生儀礼でも歳時儀礼でもないこと、キリスト教的でも異教的でもないこと（むろん、この両者のカレンダー・サイクルをベースに行われるが）、参加者の自由意思に依る部分がすこぶる大きく、世俗性・娯楽性を基本とすること、などが大きな特徴である[1]。

グリャーニエは現在も存続しているとはいえ、ロシア文化史からすれば、主として所定の期日に都市の広場・公園や通りで行われた野外祝祭と娯楽空間として一つの形式を保持してきた。18世紀以前のルーシ（ロシアの古称）の娯楽・遊戯空間が、これは何よりも資料的制約により再建がほぼ不可能であることから、その具体的な形態はほとんど不明である。そのため、グリャーニエが視野に入るのは、何よりもピョートル大帝期以降である。ピョートルの《近代化》によって近代国家と都市がその「輪郭」を明確にしたことで、グリャーニエははじめてロシア文化史の俎上に乗ることになる。そのことは、「上からの働きかけ」で庶民のみならず貴族も関わる遊戯・娯楽が「作られた・誕生した」のか、それとも同時代までのロシア社会の底層の伝統から「押し上げられた」のかという、ロシア遊戯・娯楽史の始まり・成立と起源をめぐる多くの議論を生まざるをえないが（西欧からの「カーニバル」移入、18世紀以前・18世紀前半の同時代農村の祭りの都市化等々に関して）、ここでその中身を論じる紙幅はない。ただし、このことはロシア近代の遊戯・娯楽空間の誕生をめぐるきわめて重要な問題設定となるはずである。

18世紀前半の都市、特に首都＝帝都ペテルブルクを中心に誕生したグリャーニエが明確な形式を獲得するのは、18世紀後半のロシア帝国の成長過程とともに進行するある種の大衆社会化によってである。すなわち18世紀末には、ナロードノエ・グリャーニエの基本的形式が確立し（**図１**）、以後、時代とともにその形を変えながら、都市住民を中心に、クリスマス週間、マースレニツァ（謝肉祭）、復活祭等の祭日に行われる野外娯楽として、ロシア習俗文化に欠かせぬ要素として20世紀初頭まで存続したと考えられる。

研究史を振り返ると、グリャーニエという対象がきわめて広範かつ多様な分野に関わる総合的な現象であるために、多くのバリアが存在したことは十分予想できる。しかしそれだけでなく、「大衆的」「娯楽と遊戯」「見世物」さらに「都市喧騒」「革命前庶民文化」といったタームそのもの、ならびにこれらタームの文化的意味論ゆえに、ソビエト期にはグリャーニエ研究はほとんど存在しなかった。それは、ソビエト科学アカデミーを基軸とする、厳格なディシプリンにもとづく研究所体制からは必然的に除外され、ソビエト・アカデミズムの伝統的体系とジャンル区分の中では「不透明」とならざるをえなかった。歴史学、芸術学・演劇学（音楽、サーカス研究）、民族学、民俗学、社会学、文学研究などが関連し、そのもっともマージナルな部分では理解が示されたとしても、「縦割りの」研究体制においてグリャーニエは、時に「いかがわしい」「不真面目」「猥雑」「異形・畏なるもの」として断罪され、切り捨てられる対象であり、正面から扱われることはほぼ皆無だった[2]。

1984年11月に、革命前ペテルブルクでマースレニツァと復活祭週間に行われていたナロードノエ・グリャーニエをテーマとする展覧会が開催された。場所は市の最中心部（かつて町はそこから始まった）ペトロパウロ要塞内のレニングラード史ミュージアム（現在のペテルブルク史ミュージアム）のホールである。それは、ある意味で予想されたことだが、大きなスキャン

[1] 本稿筆者はグリャーニエを「縁日」と訳したことがあるが、もちろん、日本の縁日との文化史的背景はまったく異なる。コトバとしてのグリャーニエの意味論は、拙稿（1984）「歩くこと・遊ぶこと」『なろうど』で試みた。

[2] 革命前ならびに革命直後まで、わずかながら研究史はあった。これについては、拙稿（1983）「ソビエトにおけるナロードノエ・グリャーニエ（民衆遊歩）研究の現段階と今後の方向」『一橋論叢』（89-5）に詳しいが、興味深いのは、П.Б. ボガトィリョフがグリャーニエ、見世物小屋に注目し、情報収集のための質問項目リストを作成していることである（これについては、拙稿（1980）「ロシアの見世物小屋に関する一考察」『一橋大学研究年報　人文自然科学研究』）。ソビエト期の祝祭・遊戯研究についてはM・バフチンやYu・ロトマンの他ごくわずかな例外があるのみだが、別の観点から見れば、ソビエト体制下の国家行事としての式典も視野に入れて読み替える必要があると思われる。また、コネーチヌィとほぼ同時期に、人形劇を専門領域とするА.Ф. ネクルィロヴァもグリャーニエ研究の重要性に着目して著作を準備・刊行した（1984年、拙訳『ロシアの縁日』1986年、平凡社）。

ダルを巻き起こした。1991年のソビエト崩壊、そして2003年のペテルブルク300年祭まで、いまだ少しの時間経過が必要な1980年代早々、この民衆的祝祭について興味を抱き、展覧会開催を決意・断行した一人の研究者アルビン・ミハイロヴィチ・コネーチヌィは、既成のジャンル区分や学問的権威に一切頼ることなく、ほぼ孤立した仕事の中で、自身の知的関心を貫き通したのである。ごく最近、彼はこの展覧会開催のプロセスを文章にまとめることを要請した本稿筆者に、以下のような手記を送付してきた[3]。本稿の目的は、彼のこの未定稿に依りながら、ソビエト末期の民衆文化史の一分野における祝祭・娯楽（史）研究が生まれたことの「学史的」意味を素述することにある。

Ⅱ．研究着手

「すべてはアレクサンドル・ブロークから始まったが、それは偶然ではなかった」とコネーチヌィはその手記を始めている。その記述では、1980年、詩人ブローク誕生百年祭が開催されることが「党と政府の指令」によって決定され、アレクサンドル・ブロークはプーシキンに次ぐ偉大なロシア詩人という評価と権威を与えられた。「運命の意志で」コネーチヌィと彼の妻クセーニヤ・クンパン（文学研究者、現在はロシア文学研究所（プーシキン館）所属）はブローク復権の嵐の中に放り込まれる。詩人関連のアーカイブを調査し、『文学遺産　ブローク』を刊行するための資料渉猟の仕事に二人は飛び込み、夫妻は、ブローク研究者として知られるＢ.Ｈ.オルロフの要請で『文学遺産』と『同時代人回想に見るアレクサンドル・ブローク』（全２巻、1980）の準備に奔走するのである。さらに、1979年７月から国立レニングラード史博物館の市史部門で働いていたコネーチヌィは、同博物館支部としてのブローク記念ミュージアム創設の仕事に関わることになる。百年祭の記念式典はきわめて盛大に行われ、「コントロールできない状態にまで及んだ」が、コネーチヌィの視線とスタンスは慎重である。というのも、「不眠不休で」注がれる「上部からの検閲の目」を彼は見逃さなかったからである。例えば、ブロークの家ミュージアムの書斎に掛けられていたペトログラード地図の展示の不許可、式典に出席することになっていた党地区委員会第一書記の訪問が、４階のブロークのフラットまで赤絨毯が敷かれていないとの理由でキャンセルされたという[4]。

ブローク博物館の開館は1980年11月28日で、これは大評判となり、彼はその展示プランに対してブロンズ賞を授与された。さらに彼にはブローク・ミュージアム館長就任の提案がなされたが、それを彼は「きっぱりと断り、都市史部門上級学芸員として残ることとなった」と言う。その判断は、彼のその後の研究者としての方向に大きなプラスとなったと本稿筆者には思える。

その後、彼は自身の勤務先での研究テーマとして「“北方の蜜蜂”紙上における日常・見世物生活」を取り上げた。この“北の蜜蜂”は、1825－1864年までペテルブルクで発行（最初は週三回、1831年から毎日）されていた新聞である（編集担当は、当時、プーシキンとある種の対抗関係にあったΦ.Ｂ.ブルガーリンとＨ.И.グレーチ）。コネーチヌィはこの新聞の習俗史関連の記事を前にして立ち止まる。そこに、ペテルブルク市内の祭と娯楽に関する記事が多数掲載されていること、首都と住民生活・風俗の変化が詳細に記述されていることに着目し、同紙全体が町の習俗を知る上で貴重な典拠となるとの確信を得たのである。そこで彼は、1825－1830年の紙面からの抜書を「生活年代記」としてイラスト付きで刊行することをミュージアム上層部に提案する。しかし、上記のプーシキンとの関係で、ソビエト期におけるブルガーリンや“北方の蜜蜂”紙への「悪評」常識が影響したためと思われるが、提案は拒否された（それは2010年に実現する[5]）。しかし、この“蜜蜂”紙の入念な点検は、以後の、19世紀の新聞・雑誌の紙面、それも特に新聞第一面ではなく、むしろ三面記事・「雑報欄」や情報・広告部分に目を凝らす彼の研究作業の手法と習俗誌＝史への関心を大きく展開させる端緒となった。かくして、“蜜蜂”をはじめとした定期刊行物のみならず、アーカイブ（当時のレニングラード国立歴史文書館ЛГИАその他）に民衆的祝祭関連の多数の記事・資料を発見する作業が開始されたのである。

こうした彼の研究「序奏」を後押しし、前進させる契機が、1970年代から1980年代初頭までのソビエト体制下に、特に当時のレニングラードには確実に存在していた。その契機は以下の三つと考えられる。

一つは、ユーリィ・ミハイロヴィチ・ロトマンを中核としたいわゆる文化記号学（Б.А.ウスペンスキィ、Ｂ.Ｂ.イヴァノフ、Ｂ.Ｈ.トポロフ等）の仕事である。

---

[3] Конечный А.М. Как все начиналось.「すべてはかく始まり」（2016年９月15日、改訂版同10月24日受領）　コネーチヌィの著作目録と仕事の全体に関しては、Конечный А.М. Список публикаций Конечного. 2016。さらに、拙稿「革命前ペテルブルグ文化史研究の一スタンス―A.M.コネーチヌィの仕事」（「ペテルブルグ文化史家A.M.コネーチヌィのこと」『人文･自然研究』（10）を増補したもの）を参照。ともに、『近代ロシア文学創成の環境―貴族屋敷（ウサーヂバ）の文化的・社会的ランドシャフト』（平成25～27年度･日本学術振興会･科学研究費助成事業（科学研究費補助金）基盤研究（C）研究成果報告書･研究代表者･坂内徳明、2016）に収録。

[4] 他に、ミュージアム開設ポスター（後述する画家Ａ.Б.ブトゥーリンの作）が市内に貼られたが、期間中に取り外される、コネーチヌィのテレビ・インタヴューが放映されない等々。彼自身も「大物」の訪問予定があることを理由にオープニングには参列しなかった。

[5] Петербургские очерки Ф.В.Булгарина. СПб., 2010. 392 с.+иллюстр. ここには、1820－1840年代初めの都市住民生活のハレとケに関する24編のルポルタージュ（オーチェルク）が収録されている。

これは、レニングラードが厳密な意味での固有な発信元だった訳ではないが、当時、ソビエト人文学研究の中で「タルトゥー＝モスクワ記号学グループ」の仕事が熱烈な支持を得ていたこと、レニングラードがタルトゥーに近く、かつモスクワとの結接点となっていたこと、そして、ロトマン文化記号学の中の革命前のロシア習俗文化史、特にペテルブルク文化史の面が注目されていたことが大きな促進力となりつつあった（コネーチヌィ夫妻とロトマンとの関係については後述）。1984年にタルトゥー大学から刊行された論集『都市と都市文化の記号学　ペテルブルク』がそれをもっとも象徴的に示す仕事だが[6]、これは、前年1983年２月11～13日にタルトゥー大学ロシア文学講座が開催したコンフェランスの成果をまとめたものである。

二つ目は、ソビエト科学アカデミー民族学研究所レニングラード支部（モスクワとの関係で生まれた名称だが、ここにはクンストカーメラと呼ばれる独立性の強い人類学・民族学博物館が併設）が主導したプロジェクト《ペテルブルク－レニングラード民族学》をめぐる動きである。このテーマは、1974年に始まった共同研究「ソ連邦北西地方の民族学研究」（成果は同名の論文集（1977）[7]）を継承したものだが、これは二つのテーマから構成されていた。第一は古典的な民族学研究を行う「北西地方。農村住民の伝統と文化」、第二が「ペテルブルクの民族学」であり、後者は、当時としては異色なテーマと目的を持つものである。というのも、「ペテルブルク民族学」というテーマには、かつての首都＝帝都ペテルブルクの歴史と文化を、現代も視野に入れた研究対象とし、しかも、それを民族学の視点から問題化できないだろうかという「挑戦的な」意図が見えるからである。さらに言えば、そこには、過去（革命前）の文化遺産をソビエト体制下で再評価したいとのレニングラード文化人の強い意志行動が存在していたとも考えられる[8]。

そうした動きを文字通り宣言した仕事が1982年に刊行された論文集『古きペテルブルク』（全体編集はＨ.Ｂ.ユフニョヴァ）である[9]。現代のレニングラードを視野に収めているとはいえ、革命前のペテルブルクを対象とするタイトルを堂々と掲げ、しかも各論考が扱った具体的テーマは、旧帝都の多民族性、非ロシア人住民の移動と職種別動向、初期ペテルブルクの社会的娯楽、ミュージアム資料に見る都市民の習俗、絵画資料を典拠とした習俗、市民祝祭の図像学といった、古典的民族学の対象・方法とは明らかに違った方向性を持っているものである。娯楽や習俗が正面から取り上げられ、ヴィジュアル資料の重要性も視野に入っているなど、さまざまな意味でこの論集の刊行は一つの新しい試みとなった。そして、この論集を引き継ぐ形で、《ペテルブルク－レニングラード民族学》をテーマとした研究報告会が開催される（第一回、1983年12月20～23日）[10]。コネーチヌィはこの第一回の場で第三人目の報告者として登壇している。

以上二つに続く第三の契機は方向性を同じくする研究者間の連動の力である。これもコネーチヌィの仕事の後方支援となった。彼自身の発言を引用する。

> 1982年３月18日に“ヨーロッパ”ホテルで行われたリヂヤ・ヤコヴレヴナ・ギンズブルクの80歳記念の祝賀会の折、キリル・ヴァシリエヴィチ・チストフ（民族学研究所東スラヴ部門主任）と話す機会があった。私は彼に、タルトゥーのコンフェランス（２月20～21日開催）から戻ったばかりであり、そこでペテルブルクのマースレニツァと復活祭の週におけるナロードノエ・グリャーニエに関する簡単な報告をしたことを話した。すると彼から、民族学研究所でそのテーマの報告をし、論文を書くようにと誘いを受けたのである。

チストフは、ロトマンとの良好な関係だけでなく、上記の民族学研究所の動きを先導していた、まさしくキーパーソン的な存在である[11]。かくしてコネーチヌィは「古きペテルブルク」の文化史研究の一翼を担う人の仲間入りをすることとなる。コネーチヌィは続けて書く。

> チストフのイニシアティヴで、私は日本人民族学・民俗学者の坂内徳明と知りあうことになる。初対面は1982年４月23日、ワシーリイ島ストレルカの旧取引所の近くにおいてである。（中略）同年、レニングラードへアレクセイ・レヴィンソンがやって来た。実は、徳明はモスクワに滞在した際、（たぶん、自分たち夫婦の推めで）レヴィンソンのもとを訪問していた。徳明はナロードノエ・グリャーニエに関する彼の修士論文を読んでいたのである。われわれ三人はベーリング通りの（コネーチヌィ夫妻の）フラットに集まった[12]。かくて、グリャーニエとその自立した美学の研究にとりつかれたわれらのトロイカ（三人組）が出来上がった（**図２**）。

---

[6] Семиотика города и городской культуры. Петербург. Труды по знаковым системам XVIII, 1984, Тарту.

[7] Этнографические исследования Северо-Запада СССР. Л.,1977.　コンフェランスは1974、1976、1978年の３回行われた。

[8] コネーチヌィによれば「1930年代から《古きペテルブルク》という表現は多くの作品から消えた！」。1980年代初めに、ようやく昔のペテルブルクをテーマとした研究が生まれ、広く社会化していったという。

[9] Старый Петербург. Историко-этнографические исследования. Л.,1982.

[10] 第一回の報告者はユフニョヴァ、ラビノヴィチの他、全体で26名。同報告会は2003年まで17回行われた。Этнография Петербурга-Ленинграда. Тридцать лет изучения 1974-2004. СПб.,2004を参照。

[11] チストフについては、拙稿（2010）「ソビエト期ロシア民俗学史におけるＫ・Ｖ・チストフ」『言語文化』47、Т. Баннай, К.В. Чистов и русская фольклористика советского периода. Hitotsubashi Journal of Arts and Sciences. Vol.50-1,　2009。

レヴィンソンは、コネーチヌィ同様に、最初からナロードノエ・グリャーニエを研究対象とした訳ではなかった。彼は、1972年に実態社会学研究所大学院を修了、指導教授Ю.А.レヴァダの下で理論都市学をテーマとする修士論文を提出するが、研究所内の「粛清」の影響でレヴァダが他の研究所へ左遷されたため論文は受理されなかった。その後、レヴィンソンは公園のアトラクションを企画・設計する建築家の中で社会学者として働くことになり、回転木馬（カルセーリ）を研究対象として選択する。その関連資料を探して、おそらくは1979年にレニングラードを訪問し、その折にコネーチヌィ夫妻と知り合うことになる。同じく1979年に論文「ナロードノエ・グリャーニエの社会史　カルセーリ」を発表した彼は、翌1980年には修士論文「ナロードノエ・グリャーニエにおけるロシア芸術のフォークロア伝統の発展」を芸術学研究所へ提出し受理された[13]。本稿筆者はこの論文を読んだのである。

Ⅲ．展覧会の決断

1983年２月、タルトゥーで行われたコンフェランスで、コネーチヌィはペテルブルクの見世物小屋について、レヴィンソンは回転木馬の《呼び込み爺》に関する報告を行った。二つの報告は、ロトマンが文化史、世俗および宮廷習俗史の見地から、ミンツがブロークの詩との関連から高く評価し、コネーチヌィの背中を強く押した。上記のとおり、二人ともタルトゥー大学ロシア文学講座をホームグランドとして、文化記号論を方法として新たな文化（史）学を目ざすグループの人脈における中核的人物である。

タルトゥーから戻ったコネーチヌィは関連資料の本格的な収集に取り掛かる。勤務先のレニングラード史ミュージアムは当然として、市公共（シチェドリン）図書館（現在のロシア・ナショナル図書館）のヴィジュアル資料を収蔵するエスタンプ部門、モスクワの歴史文書館、演劇博物館、モスクワ歴史・修復博物館での文献調査に多くの時間を費やすと同時に、新聞“北の蜜蜂”を読み直してグリャーニエをはじめとする習俗関連の資料を発掘・点検した。それは、彼個人の丹念な仕事であったとはいえ、一方で、この分野で興味を共有できる数少ない研究者との交流・協力と助言の賜物であったことも忘れてはならない（文学研究者でサーカス史家А.Г.レベヂェヴァ、文献学者、サーカス・演劇史家で貴重な『サーカス小百科』編者のА.Я.シュネエル他）。

こうした研究成果を公表する機会が訪れた。それが、上記した民族学研究所主催の《ペテルブルク－レニングラード民族学》をテーマとした第一回報告会における「ペテルブルクのマースレニッアと復活祭週間のナロードノエ・グリャーニエ」と題する報告であり、これがまさに彼のグリャーニエ研究開始宣言と呼ぶことができるものである[14]。

彼がこの分野の先行文献としてあげるのは次の二冊である。一つはА.Б.レイフェルトの『見世物小屋』（1922年、А.Н.ベヌアによる序文）、もう一つがЕ.М.クズネツォフ『アレクセエフ＝ヤコヴレフの語りによるロシアのナロードノエ・グリャーニエ、エヴゲニイ・クズネツォフの聞き書き・推敲による』（1948）である[15]。前者は、見世物小屋の演出家兼監督だった人物の回想記であり、巻末に見世物小屋の「舞台」に上った演目リストが掲載されている。後者は、革命前に実際のグリャーニエを体験し、革命後はサーカス芸術監督として活躍したアレクセエフ＝ヤコヴレフが語ったことをクズネツォフが編纂した著作である。共に、革命前のグリャーニエを知る上で貴重で、もっとも基本的な文献である。ただし後者は、1930年代初めにアレクセエフから聴き取ったものを編集し、戦後完成したことには留意しなければならない。コネーチヌィは「この本が、情報量の大きさと価値にもかかわらず、コスモポリチズムとの闘いの時代に書かれた書物であることを考慮すべき」としている。この点は、クズネツォフの全体像の解明とともに、今後の研究に任せねばならない[16]。

コネーチヌィは文献調査の過程で、アレクセエフがクズネツォフの依頼を受けて1930年代初めにこの祝祭の模型を作っていた、との情報を入手する。上で記したとおり、アレクセエフが革命前のグリャーニエに実際に参画していたことからすれば、ありえることである。クズネツォフは1940年代のイデオロギー・キャンペーンの時期に、革命前の大衆見世物文化史に関する一部資料を隠ぺいしたこともあって、模型の捜索は大きな難問だった。しかし、サーカス芸術博物館の研究

[12] 補足すれば、送付原稿前のメモに「1979年のことだろうが、アレクセイはカルセーリとブランコの歴史に関する資料を探して、モスクワの共通の友人アレクサンドル･オスポヴァトのアドヴァイズで、当時、プブリーチナヤ図書館で働いていたクセーニャ・クンパン（コネーチヌィの妻）に助けを求めた際、彼女がアレクセイを私たちの家に連れて来た」とある。筆者がモスクワのレヴィンソンの家を訪問したのは1982年5月、彼のアパートでほぼ終夜で修士論文を読んだ（目を通した）。筆者によるグリャーニエ研究の成果は、上掲（1983）の他に、「エカテリンゴフのグリャーニエ　歩くことは遊ぶこと」季刊is 22（1983）、「ペテルブルクのナロードノエ・グリャーニエ―18世紀末 - 20世紀初頭」『ロシア史研究』43（1986）。

[13] この時期の彼の論文の一部は、以下にあげる彼の仕事の集大成的論文集に収録されている。Левинсон, А. Опыт социографии: Статьи. М., 2004. 664 с .

[14] 同報告会でコネーチヌィは第一回から第九回まで毎回、第十一回から第十四回（1998年６月）まで発表を行っている。

[15] Лейферт А.В. Балаганы. Пг., 1922 ; Кузнецов Е.М. Русские народные гулянья по рассказам А.Я.Алексеева-Яковлева в записи и обработке Евг. Кузнецова.М.-Л., 1948.

[16] クズネツォフの記述、ならびに彼が依拠するヤコヴレフの記憶がいくつもの事実誤認や思い違いを含むことについてはコネーチヌィの発言がある。前掲拙稿（2016, 163）を参照。クズネツォフの主著（1931）は翻訳がある（エヴゲニイ・クズネツォフ『サーカス　起源・発展・展望』桑野隆訳、ありな書房、2006）。

員たちの好意的協力もあり、倉庫、建物内の懸命な捜索を許可され、その結果として模型はコネーチヌィの手で見つけ出された。1983年夏の初め、著しく損傷した模型の発見をコネーチヌィは「人生でもっとも喜ばしい見つけもの」と呼んでいる（**図3**）。

それは即、展覧会をしなければ！との決断へつながる。そのアイディアを側面から促したのは、1983年6月に市史ミュージアムで開催された《ペテルブルクの習俗シーン》展であり、そこでは、同ミュージアム絵画・グラフィク部門の研究員の手で19世紀グラフィック、絵画、装飾工芸品といった革命前ペテルブルクの習俗史＝誌の資料が展示されていた。

展示テーマ・プラン作成の仕事がコネーチヌィを待っていた。発見された模型は一時的に市史ミュージアムへ移されて、修復作業が始まったが、レンフィルムの画家Ｅ.Ｃ.フォミナの無償サポートという協力もあった。失われたディテールの再建（見世物小屋、回転木馬、「丘」と称される大きな滑り台、屋台等々）には写真、リトグラフ、スケッチ、ルボーク、アーカイブ内の絵が不可欠であり、文字情報の網羅的な収集・整理が進んだことは当然である。この間、文書館、図書館、諸博物館での調査活動は全体として問題なく、順調に進んだ。ミュージアム内の彼の部門での調整も好意的だったが、以前生じた“北の蜜蜂”のケースもあったことを考え、どこで障碍が起きるか分からないとの判断から、コネーチヌィは専門家のサポートを求める。それは、当時、緊密な結びつきになりつつあった民族学研究所である。1984年３月付け「事前評価」は来るべき展覧会の内容をきわめて具体的に伝える貴重な資料である。

国立レニングラード史博物館（ГМИГ）上級学術研究員A.M.コネーチヌィによって作成された《ペテルブルクのナロードノエ・グリャーニエと娯楽》展のテーマ・展示プランに対する評価

ナロードノエ・グリャーニエと娯楽をテーマとするГМИГにおける展示に対して、すべての点で歓迎の意を伝えるべきと考えます。これは、《ペテルブルクの習俗シーン》展で開始されたテーマを継続し、かつ、その内容の点で新たなもの－特に、これまで諸博物館ではほとんど見られなかった都市習俗全般とナロードノエ・グリャーニエの展示という、まったく新しいものとなるでしょう。それと同時に、民衆の祝祭に関する問題は、歳時儀礼のコンテクストにおいても、都市大衆の習俗文化のコンテクストにおいても、学問的に大いに興味あるものです。教会が正教祭日（キリスト生誕祭、復活祭等）に合わせて行事を行っているが、古代の異教起源を持つ歳時儀礼に関しても、近年、多くの興味深いモノグラフが出版されている。しかし、都市の祭に関しては、この問題は実際上、学問的には未開拓である。また、ペテルブルクのグリャーニエをテーマとする展示が、無条件で、もっとも広範な人々に興味あるものとなるだろうことは指摘しておくべきである。

展覧会のテーマ・陳列プランは学問的に高度のレベルで作られている。「展示根拠」の簡潔な説明は広範囲に及ぶ典拠の膨大な検証と規範化によっている（A.M.コネーチヌィが作成した「歴史的情報」を参照）。「展示根拠」はすっきりと、論理的に書かれており、将来の展示会との結びつきも緊密に結びつけられている。そして、ほぼ同様な形で、グリャーニエの三段階の展示を予告する三つのテクストとして展示で使われているかに見える。テクストに対して一つ問題がある。というのは、第一ホールで《マースレニツァ》と《春》のグリャーニエについて語られ、第二、第三ホールで《マースレニツァ》と《復活祭》について語られることに関して、春の祭日は復活祭だけではないことから、第二バリアントが正しいことは指摘しておく。マースレニツァと復活祭のグリャーニエが特別に展示されたことは、教会祭日の宗教的基盤をほぼ完全に覆い隠した民衆的伝統の驚くべき力がそこに現れている点で興味深い。

展示品の選択はとても成功している。特に素晴らしいのは、それらの中に実物と模型があることで、さらに、そのいくつかは実際に動く形での展示は注目に値する。見世物小屋のポスターとプログラムが興味を引くのは当然である。展示の色彩にも注目すべきである。全体の装飾は演劇化されたスタイルで実現されるだろう。

ソ連邦科学アカデミー民族学研究所東スラヴ部門上級学術研究員、歴史学博士　Ｔ.Ｂ.スタニュコヴィチ

ソ連邦科学アカデミー民族学研究所東スラヴ部門上級学術研究員、歴史学博士候補　Ｈ.Ｂ.ユフニョヴァ

1984年３月

ここで署名をしている二人はともに、ソ連科学アカデミー民族学研究所の研究員だが、特に、同研究所のレニングラード支部はピョートル期以来の歴史を有する《クンストカーメラ》（ライプニッツ提唱のKunstkammerのロシア版）を併設する。署名者の中の前者はこのクンストカーメラの歴史を専門とする、ミュージアムにとって生き字引的存在である（主著は『ペテルブルク科学アカデミーのクンストカーメラ』（1953）『民族学と博物館』（1978））。一方、ユフニョヴァは先述した《ペテルブルクの民族学》報告会の実質的組織者であり、ペテルブルクの多民族構成・人口学をテーマとする研究者である（博士論文の刊行物『ペテルブルク住民の民族構成と民族・社会構造』1984）[17]。二人の背後に、東スラヴ部門主任のチストフの存在があり、また、おそらくコネーチヌィの展覧会プランを詳細に検討していたことは書かれた内容から明らかである（非キリスト教・異教の祭の意味付け等々）。

Ⅳ.《グリャーニエと娯楽》展

1984年11月11日、15時より《ペテルブルクのナロードノエ・グリャーニエと娯楽　18世紀末～20世紀初頭》展が開催された。場所は、ペトロパウロ要塞跡地の旧要塞司令官の館、当時のレニングラード史博物館（現在はペテルブルク史博物館、住所はペトロパウロ要塞4番地）内である。ホールは、上述の推薦文とは少し異なり、第一から第四まで、入口ホールのキャンバス枠には、コネーチヌィの友人画家Ａ.Б.バトゥーリン[18]によるグリャーニエのポスターが掲げられた（**図４**）。ただし、未だ市中には展覧会ポスターが張られなかったので、オープニングの参加者は、ほとんどが展示に協力してくれたミュージアムのスタッフ、そして友人と興味を持った人々だけで、後者のためにコネーチヌィは第一回目のエクスカーションを行った。

展示品は全体で約150点である。その出所は、国立レニングラード史ミュージアムのさまざまなフォンド（グラフィックと絵画、写真、ポスター、習俗史コレクション）―M.E.サルトィコフ＝シチェドリン記念国立公共図書館エスタンプ部、サーカス芸術ミュージアム、レニングラード国立歴史文書館、国立ロシア・ミュージアム、レニングラード国立演劇・音楽ミュージアム、Ａ.Ｂ.ルナチャルスキィ記念レニングラード演劇図書館、レニングラード国立映画・写真ドキュメント文書館である。

ホールの展示は年代順に、見世物小屋の歴史の三つの時期を反映した形で行われた。第一ホールは18世紀末～19世紀第１三分期の民衆娯楽、第二ホールは海軍省広場の祝祭（1827～1872）、第三ホールはツァリーツァの原（マルスの原）、プレオブラジェンスキィ、セミョノフスキィ両練兵場のグリャーニエ（1873～1901）、そして最後の第四ホールは祝祭の広場でもっとも好まれた娯楽である屋根付き回転木馬と《呼びこみ爺》をテーマとする。

グリャーニエの歴史を構築する上で重要な資料学の問題は、19世紀初頭までの基本資料が、アーカイブ文書が見出せない（おそらく、存在しない）ことからヴィジュアルな資料となる点である。民衆娯楽に関する記事は1810年代の定期刊行物に初めて登場する。しかも、その時期にロシア人画家がペテルブルクの習俗に注目することはほとんどなく、民衆の祭りを描いたのはそれに好奇心を抱いた外国人画家たちであった（18世紀末～19世紀初頭）。彼らは「風変わりな」ロシアの日常習俗におそらくはエキゾチズムとして興味を持ち、多くの絵の中でマースレニツァの大滑り台、復活祭の観覧車やブランコを描いた。この時期のグリャーニエの大きな特徴は見世物・演劇的形式ではなく、むしろ現代のアトラクションの原型であり、その周囲に祝祭の広場の空間が形成されていた。

第一ホールはこの時期のヴィジュアル資料を展示している。マースレニツァ週間のグリャーニエは何よりもネヴァ川氷上（むろん、堅固な場合）、具体的には、スモリヌィ修道院向い（Ｘ.-Г.ハイスラーの版画）、夏の宮殿向い（M.-Φ.ダマム・デマルテの銅版画）、ペトロパウロ要塞向い（Д.クヴァレンギ版画、H.セラカプリオル、П.П.スヴィニインのリトグラフ）、ワシーリイ島ストレルカ向い（Й.-E.マルクース版画**図５**）、ペトロ（セナート）広場（Д.-A.アトキンソンの絵）で行われた。冬の、「丘」と呼ばれる木造の滑り台はつねに二つ（高さは20m）で、多くはネヴァ川彼岸オフタの大工によって、互いに並行するが別方向に聳え、滑る途中で対向する形で設営されていた。台の滑走部分には氷が置かれて散水され、塔の頂上部には色とりどりの旗や樅の木、時には彫刻や「風景画」が飾られ、暗くなると滑り台は照明で照らされた。18世紀第3四半期には、復活祭週間にも滑り台が登場したが、これは宮廷の滑り台をモデルに造られた（オラニエンバウム、ツァールスコエ・セロー）。

復活祭のグリャーニエはネヴァ川左岸の場所―センナヤ広場（ハイスラーの版画）、演劇広場（クヴァレンギの絵によるД.スケルトンの版画）、ペトロ広場（セナート広場、ガラクチオノフの版画）、ツァリーツァの草原（マルスの原、マルクースの版画）で行われた。このグリャーニエの中心は各種のブランコと回転木馬だった。18世紀末にはブランコがマースレニツァにも造られていた。

ヴィジュアル資料はグリャーニエの場所（トポグラフィ）を教えてくれるだけではない。それらは、民衆娯楽の見世物形式の進化、グリャーニエの場所の空間構成、広場建物の建築と外形、都市タイプ、祝祭の雰囲気までも示していた。多くの版画や絵画で庶民風俗が描かれるのは1790年代のことである。それ以前のさまざまな都市の描写では添景として見られるが、絵画のテーマとなることはなかった。外国人画家たちは、自身の作品の中に、滑り台、ブランコ、回転木馬をエキゾチックな形で描き、祝祭の広場を散策するペテルブルクの人々にロシア人らしからぬ衣装を着せて表現した。

滑り台やブランコの周囲には納屋か仮小屋状の小さな建物が建てられたが、これは1820年代から「見世物小屋」（バラガン）という名前に定着し、祭りそのものも「滑り台のグリャーニエ」「見世物小屋のグリャーニエ」（マースレニツァ）、「ブランコ脇のグリャーニエ」（復活祭）と呼ばれるようになった。この木造

[17] Станюкович Т.А. Кунсткамера Петербургской Академии Наук. Л., 1953 ; Она же Этнографические науки и музеи. М.-Л.,1978 ; Юхнева Н.В. Этнический состав и этносоциальная структура населения Петербурга. Л.,1984.

[18] アレクサンドル・Б・バトゥーリンは1914年にヘルシンキに生まれた画家、1930年からレニングラードに住む。K.マレーヴィチの弟子であるВл. ステルリゴフに学ぶが、1934年に師や仲間とともに逮捕、1935年にウファへ流刑、1956年に名誉回復後、レニングラードへ戻る。2003年に死去。

のバラガンでは人形師や曲乗師が上演し、コメディアンが芝居を披露した。

祭りの最初の３、４日は祭りにやって来る人はそれほど多くはなかったが、木曜日（この伝統は19世紀にも残った）以降はほぼ町全体が滑り台やブランコの周りに集まった。一般大衆や裕福な市民がグリャーニエにやって来るのは、新しい馬車やモードを見せびらかすためであり、人々の楽しみを眺めるためだった。祝祭の広場はある種の舞台（劇場の中の劇場）となり、グリャーニエ参加者は観客と同時に登場人物であった。

グリャーニエは一週間（日曜日から日曜日まで）続くが、真昼12時のペトロパウロ要塞からの大砲の信号と、すべての大きな建物での色とりどりの旗の掲揚によって始まり、晩の８時に終了した。

第二ホールに示された海軍省広場での祝祭（1827〜1872）は、演劇・見世物芸術の最盛期であり、古典的タイプの「見世物小屋の」グリャーニエの形成期である。

広場には年二回（マースレニツァと復活祭の週間）、宮殿広場からイサーク広場まで1km以上伸びる娯楽エリアが出来上がった。第一列目には、ネフスキイ大通りに正面を向けた大きな見世物小屋（劇場がほとんど）が並んだ。海軍省の建物に沿って二台の滑り台（つねに滑走路は向き合う形の）が聳え、小さな建物が立っていた。第二列の端にも見世物小屋が立っていた。広場全体の見世物小屋は16（平均12）を数え、幅と高さは規定されていたわけではないが、1836年以降は10サージェン（21m）以下とされた。

市民の主要な娯楽となっていたのは、見世物小屋劇場でのさまざまなジャンルの上演であった（そこでは、戦闘や冒険をテーマとした短なパントマイムや「活人画」が披露され、魔術師や曲乗師が登場した）。1830年にレーマンの見世物小屋で、市民はアルレキーノのパントマイムを初めて見るが、これは以降もっとも好まれる演劇的な見世物となった。

広場演劇のライバルは大きな回転木馬と《爺》による呼びこみ＝口上である。展覧会のヴィジュアル資料から、18世紀農村の「マースレニツァの車輪」（馬車の輪はネヴァ川に杭として氷詰めされた）から19世紀半ばの巨大な設備―アトラクションと演劇的見世物のジンテーゼである大きな屋根付き回転木馬（その中では、「活人画」の芝居や短いパントマイム、踊りのための舞台があった）―へ歴史的に変化していったプロセスをたどることができる。

こうしたすべては、Ｋ.П.ベグロフ（**図６**）とＢ.Φ.チムのリトグラフ、Ｂ.Ｃ.サドヴニコフの水彩画、Л.А.セリャコフの版画、絵「見世物小屋のそばで」その他、そしてルボーク（民衆版画）や1860年代の写真（滑り台、ブランコとカルセーリ、商人マラフェエフの見世物小屋とパントマイム「ロシア人とカダルダ人の闘い」の広告その他）に見ることができる。

特にこの展覧会で注目すべきは、庶民が大いに気に好んだ楽しみの一つである「覗きからくり」（ラヨーク）である（**図７**）。これは、「楽しいパノラマ」の模型とそこで映された人気のルボーク（「ネズミをネコが埋葬する」、「ラヨーク」シリーズの絵、「ポンペイ崩壊最後の日」その他）が示され、これには、絵の主題とは時として対応しないことがある自由気ままな弁士（パノラマ所有者）の語りがついていた。

「楽しいパノラマ」の反対側には、人形劇「ギニョル」（1867年制作、ロシアのペトルーシュカの類似品）の幕と人形があった（**図８**）。

1830年代のグリャーニエに登場したのは、諸都市やヨーロッパのエキゾチックな街角の美しい風景画、記念すべき歴史的事件を見せる《パノラマ》（あるいは《コスモラマ》）と呼ばれる特別の設備である。展覧会では、19世紀の古いステレオスコープ―風景写真をガラスに大きく映し出す光学機器―がその役目を果たした。

見世物小屋のレパートリイの特徴については実物のポスター広告が物語ってくれる―「サーカスと猿Φ.リッパルドのボリショイ劇場」（1865）「Ｂ.ベルグの民衆パントマイム劇場」（1866）とＢ.ベルグの見世物小屋の上演原稿コピー「商人ウゴレロフの地獄への旅」（1871）。また、1854年のマースレニツァの際の建物配置図と賃借者名簿（賃貸者の姓と国籍、小屋の規模と上演ジャンルを含む）、マラフェエフの見世物小屋の設計図もおかれていた。

マースレニツァと復活祭のグリャーニエの場面を示すものとして、名だたるペテルブルクの陶器工場がかつて皇帝一家のために作り、現在は市史博物館のコレクションとなっている陶製の小像や復活祭の彩色卵が展示されていた。また、グリャーニエを描写する技法の変化も展示からたどることができた。すなわち、1820年代には銅版画の代わりにリトグラフがグリャーニエを題材とし、後にはルボーク、さらには写真（特に、1890年代）がその役目を果たした。

第三ホールはツァリーツァの草原（1873〜1897年マースレニツァ）、プレオブラジェンスキィ練兵場（1897年の復活祭）、セミョノフスキィ練兵場（1898〜1901）で行われたグリャーニエを取り扱っている。このホールの中心的な展示物はユニークな模型（長さ84ｃｍ×幅43ｃｍ）である。これは「“滑り台”、“見世物小屋”、マルスの原で1870〜1880年代のマースレニツァで行われたナロードノエ・グリャーニエ」と呼ばれ、1930年代初めにＡ.Я.アレクセエフ＝ヤコヴレフが制作し、画家Ｅ.Ｃ.フォミナが修復したものである。

模型には、ツァリーツァの草原（マルスの原）に作られた建造物がすべて再生されている―見世物小屋劇場（とその看板）、滑り台、回転木馬、ブランコ、射的場、蝋人形館、消防車庫、見張り警官詰め所、物売り小屋（「ベルリン・パン」その他）。マルスの原では大きな見世物小屋劇場の数は、海軍省周辺のグリャーニエと比べて、４、５軒と少ないとはいえ、それでも魅力は損なわれていなかった[19]。ここには、アトラシ

ョン形式の発達と完成が見られ、波に揺れるかのように回る帆船型の回転木馬が登場し、夏の滑り台は《アメリカの丘》というエキゾチックな名前の機械装置（ジェットコースターの原型）となり、上下するブランコは現在の遊園地の「観覧車」の形となっている。

この時期のグリャーニエは、写真の他に絵、ルボーク、道化師アナトリイ・ドゥーロフ慈善興行や見世物小屋劇場（A.ベルグ、B.エガリョフ、レイフェルト**図9**、レガト）の広告、見世物小屋上演のプログラムや原稿、ガードナー工場製の彫像によって見ることができる。ホールの最後を飾るのは、1922年３～４月に市議会ホールで開かれた「昔のペテルブルクの見世物小屋の思い出に捧げられた夕べ」展へ招待する《古きペテルブルク》協会[20]の広告である。

第四ホールは祝祭の広場でもっとも好まれた娯楽をテーマとする。すなわち、屋根付き回転木馬と呼びこみ《爺》である。この《爺》[21]は駄洒落にあふれた歓声で群衆を「連れ込み」、回転木馬の中で自分の体をゆすぶると同時に、設備の中央にある小さな回り舞台上での芝居を見るように誘うのである。社会学者であるレヴィンソンの考えによれば、こうした回転木馬は「宗教劇＝見世物として、ミニュアチュールの中でグリャーニエのシステムを反復していた」。マルスの原の屋根付きカルセーリと《爺》は蒸気で動く「大きなメリーゴーランド」となっていった。

このホールの中央の壁には、「大きなメリーゴーランド」と「回転木馬の爺」の巨大な写真が、壁の左側には口上師の持ち物として、ツギをあてた農民外套と草鞋、グリャーニエでの商いに必要な品物である蜜湯沸かし、クワス沸かし、蜜漬梨の壺、ジョッキ、深皿、タオル―が置かれたテーブルがあった。壁の右側には、1923年12月から1924年１月７日まで、ニコラエフスキィ騎兵学校調教場で行われた「巨大なクリスマス週間のグリャーニエ」を告知する《古きペテルブルク》協会の有名なポスターがかけられていた（**図10**）。だが、この協会による、ナロードノエ・グリャーニエの伝統的形式を新しい時代の社会的条件へ適応させたいとする試みは叶わなかった。

展覧会の出口では、希望者は、スィッチを入れると手回しオルガンの音と街頭商人の叫び声の録音を聞くことができるようになっていた。

Ⅴ．反響

展覧会に対する反応は素早く、かつ大きかった。新聞、ラジオ、テレビの多くがこの催しについて取り上げた[22]。コネーチヌィはそれを「来るべき変化を明らかに予感させるものだった」としている。それは、1982年に始まり、1985年まで続くソビエト共産党第一書記三名の目まぐるしい交替劇（ブレジネフ、アンドロポフ、チェルネンコ）を指している（スターリンの「五年計画を三年で！」になぞらえて「五年計画を三つの棺で！」と巷間で言われていたことをコネーチヌィは記録している）。マスコミの注目に加えて、多くの媒体による宣伝や広告、派手で風変わりなポスターのおかげで展覧会入場者数は飛躍的に伸びた。

この展覧会の反響を示すもっとも具体的で興味深いテクストは、見学後に入場者が記入するアンケート回答である。それは、文化局が項目を指定した用紙に記入するもので、形式は「姓・名前・父称、年齢、学歴、職業」となっている。コネーチヌィの記述によれば、現時点で見つけ出された回答は約30枚という。書かれた日付がないものもあるので、正確な前後関係は不明だが、重要なのは、展覧会の企画に賛意を寄せていた民族学研究所東スラヴ部門のメンバーの反応である。

> 《ペテルブルクのナロードノエ・グリャーニエと娯楽》展は学問的・社会的に注目すべき関心を示しています。それは、わが町の歴史の欠かせない部分である古きペテルブルクの習俗のもっとも興味ある側面の一つが示されています。その学問的アクチュアリティは、中でも、革命前ペテルブルク-現代レニングラードの民族学に関して開始された（あるいは、正確には再興された）研究であるということにあります。
>
> 注目すべきは、展示の設営に先立って、探索において目覚ましく、かつ有効な仕事―ナロードノエ・グリャーニエの歴史に関する資料の解明と収集―がおこなわれたことです。
>
> 展示は良く出来ており、論理的かつ興味深く組み立てられています。
>
> 展示は、歴史的価値だけでなく、きわめてアクチュアルなインフォメーションを持っています。非宗教的な習俗儀礼を現代において構築することがつねに成功するわけではないことは知られています。それはまさしく、昔の都市の（農村のではない！）祭りと娯楽の伝統が使われていないためです。
>
> ソ連科学アカデミー民族学研究所研究員
> 東スラヴ民族学部門主任、ソ連邦科学アカデミー

[19] コネーチヌィの記述の補足をすれば、この時期の、具体的には1880年から1898年までのペテルブルクのマルスの原に設営された見世物小屋でのレパートリイは、レイフェルトが書き残している（拙稿（1980）228-237を参照）。

[20] 革命前後の時期に同《協会》（1920/21～1938）とそのミュージアム（1907～）が果たした役割は大きい。協会に関しては、コネーチヌィの研究成果がある。

[21] 呼びこみ爺の口上については、民俗学・口承文学研究の面からテクスト収集と研究がある。とりあえず、拙稿（1979）「ロシアにおける街頭の言葉：見世物小屋の呼びこみについて」『言語文化』。

[22] ジャーナリズム等の反応は、コネーチヌィの手記11枚目の注にリストがある。

準会員　K.チストフ
上級研究員、歴史学博士　T.スタニュコヴィチ
上級研究員、歴史学博士候補　H.ユフニョヴァ
上級研究員、歴史学博士候補　E.イヴァノヴァ
下級研究員、歴史学博士候補　Φ.リュシケヴィチ
上級研究員、歴史学博士候補　T.シャフラノフスカヤ
1984年11月27日（**図11〜12**）

先に紹介したチストフに主導されたグループの反応であり、事前の推薦文を書いた二人も加わっている。短いながらも的確な評価を与えている。署名は各自だが、本文の著者は筆蹟からチストフである。

同じく民族学研究所一般問題グループの指導者で、幅広いフィールドワークと民族学・民俗学の分野でロシア以外でも広く知られているプチロフの評価は次のとおりである。

プチロフ・ボリス・ニコラエヴィチ、高等教育、文学博士、ソ連邦科学アカデミー民族学研究所上級学術研究員
展示は注目すべきで、きわめて興味深く、古きペテルブルク - レニングラードの習俗と文化に対する幅広い関心に高度なレベルで対応しています。その背後には、企画組織者たちのきわめて大きな、苦労の多い仕事があります。私の提案として、
1）展示を博物館展示品として保存すること
2）展示を特別な出版物の形―カタログあるいは本―とする方策を講じること
価値ある興味深い企画に感謝します。
Б.プチロフ

ロトマンと妻ミンツは、タルトゥーならびにペテルブルクでコネーチヌィ夫妻と個人的な交流があり、当然、展覧会にも足を運んだ。ただし、日付けがないのは少々残念である[23]。

ロトマン・ユーリィ・ミハイロヴィチ、63歳、高等教育、文献学者、文化史家
展示は文化ならびに社会・教育的に大きな意味を持ちます。それは真の民衆文化を、プーシキンがとても愛した、そしてA.N.オスとロフスキィその他の多くのロシア文化人の作品を育んだ民衆の生活と民衆的精神の側面を示しています。民衆生活のこの領域がまったく研究されていないことから、展示を準備した人たちは巨大な独自の学術的な仕事を成し遂げたことは明らかです。この仕事を支持し、継続することが不可欠です。そうすることが我々の学問と文化における今日の切実な諸問題に答えることになります。
文学博士、教授Ю.ロトマン（**図13**）

ミンツ　З.Г.　58歳、高等教育、文献学者＝ロシア研究者
展示はとても興味深いだけでなく、学術的に大きな関心の的になります。例えば、展示品の中には、A.ブロークのドラマ『見世物小屋』（ペテルブルクの「アルレキーノ」）、詩「柳の土曜日」を理解するために役立つ資料があります（展示品として、小さな陶製像、卵、玩具等々）。展示によって過去の習俗や民衆文化の側面を再建することができ、それは現代の演劇や映画を制作するために必要です。
国立タルトゥー大学教授、文学博士З.ミンツ

演劇・映像関係者の発言も重要である。

チメンチク・ロマン・ダヴィドヴィチ、40歳、文学博士候補、ソ連邦ラトヴィア共和国青年劇場文学部門主任
この展示＝研究は、演劇と都市の関係、舞台周辺と舞台外空間の決定、観衆を演劇へ引き込むこと、演劇のフォークロア的ルーツの活性化と再興といった問題に、現在および過去に一度でも関わったことのあるソビエトの演劇人、舞台監督、舞台装飾家、劇作家のすべてにとってきわめて重要です。劇場で現在働く人々、表現力豊かな手法でレパートリイを革新させようとする人々のすべてがこの展示を知る必要があります。展示を展開させる論理それ自体がごくまれに「演劇的」【強調は回答者】であり、展示会そのものが小さなスペクタクルとなっています。このような内容ある、賢明で、有益な見世物展に対して主催者に心から感謝したいと思います。
P.チメンチク

ヴォルコフ・レオニード・ミハイロヴィチ、50歳、高等教育、映画演出家
自らの創造の人生をかけて、しばしば私はわが町の歴史をテーマに映画を撮ることになりました。今日私が分かったのは、以前、こうした資料を見たことがないということです。多くのエピソードをより興味深く、表現的に、歴史的に正確に解決できるでしょう。この素晴らしく輝かしい、とても役立つ展示会に感謝します。
ソ連邦映画関係者連盟秘書、ソ連邦国家賞受賞者

[23]「ベーリング通りにあった我々の一部屋のみのアパートで、ユーリィ・ミハイロヴィチ（ロトマンのこと）はパーヴェル帝期の習俗についてゼミナールまでしてくれたし、ザラ・グリゴリエヴナ（ミンツ）は『文学遺産』ブロークの巻の準備のためにアーカイブについて意見を述べてくれた」「彼らが我が家を訪問した何回目かのある時、1985年冬、展覧会に二人を招待した（ロトマンが巨大なルボーク《ポンペイ崩壊最後の日》を長いこと見つめていたのを覚えている）」。

Л.ヴォルコフ　1984年12月１日

プファリョフ・ユーリィ・ミハイロヴィチ、35歳、高等教育、演出家
私の印象は、素晴らしい！　驚くべきで美しい！という一言で表現できます。この展示会の意義を過大評価することは難しく、展示は教育的であり－これまで、これほど珍しい資料の収集を一度に見ることは出来ませんでした。また、プロフェショナルな人々にもそれ以外のすべての人々にも役に立つことでしょう。これほど素晴らしい始まりを生かさない法はありません。ただし、展示カタログがないのは残念である。収集された資料をもとに、演劇的なプレゼンテーションがなされ、それを本物の資料で作ることが出来ればよいし、さらに多くのことができるはずです!?　ロシア文化のプロパガンダはこの点にこそあり、それは不可欠です。われわれが自身の文化をより広く、深く学べば学ぶほど、現代文化の豊かさのより多くの根拠を期待できるのです。
再度、主催者のとてつもない仕事と自己献身に、特にコネーチヌィ、アルビン・ミハイロヴィチに深く感謝します。
Ю.プファリョフ

レニングラード人形劇＝マリオネット劇場のメンバーは、ロシア（ならびにペテルブルク）の文化と歴史のもっとも輝かしい一コマとなるこのユニークな【下線は回答者】展示のオーガナイザーに大きな感謝をいたします。このホール終了後、今回の展示の続きがおこなわれないようならば、とても残念で、気まずく、反国家的と思えます。
このユニークな展示のカタログは絶対に必要ですし、レニングラードならびにその他の都市のさまざまなホールでの展示は欠かせません。
この展示のオーガナイザー、創作者で入魂者であるアルビン・ミハイロヴィチ・コネーチヌィに大いに感謝します。展示を仕上げる上で入念に考え込まれた学術的なアプローチがすべてに見出されます。
大変有難う！
エクスカーション参加者全員の要請により、ソビエト連邦ロシア共和国、劇場主任演出家
Ｂ.Ｈ.ロプヒン

次にあげる音楽家は、フォークロア映画の音楽の作曲家として広く知られた人物である。

マチエフスキイ・イーゴリ・ヴラヂミロヴィチ、作曲家、民族楽器研究者、高等教育、芸術学博士候補、ソ連邦作曲家連盟フォークロア委員会代表代理
素晴らしい展示会である！　あらゆるサポートに値するものであり、次はさらにより広範なものとなるでしょう。カタログが作られ、この展示資料が一冊の本として出版されると良いものです。また、個々のエピソードの生の復元が試みられると良いでしょう。
大成功をお祝いします！
И.マチエフスキイ

クロリ・ユーリィ・リヴォヴィチ、53歳、高等教育、東洋学者、ソ連邦科学アカデミー東洋学研究所レニングラード支部上級学術研究員
古きペテルブルクの民衆的祝祭をテーマとした展覧会は私に最良の印象をもたらしました。主催者の努力、高度なプロフェショナル・レベル、仕事への愛情のおかげで、これまでレニングラードの人々が関心を持たなかった輝かしい資料を収集・確定し、体系化して展示することができたのです。観客の目前には、ほとんど知らなかった町の歴史がページ一面に繰り広げられ、自分たちの文化の本質的な側面を理解し意味づけるページとなっています。
この展覧会が出来る限り数多くの人々に見てもらえるよう、そしてこの展示が常設になるよう【回答者】に強く望みます。
Ю.クロリ

Ｈ.Ｔ.ヤグロヴァ、Ｍ.Φ.コルシュノヴァ、Ｅ.И.キリチェンコ――高等教育、芸術学者、博士候補、レーピン記念研究所、国立エルミタージュ、芸術学全ロシア学術研究所
展覧会は、革命前ロシアの都市における文化的生活のまったく未知の分野の情報を提供してくれます。これまで研究されたのは職業演劇の領域でしたが、過去においては、それとともに、かつては現象を分ちえない一つのものとして結合し、後に独立性を獲得した民衆的祝祭の自立した伝統が存在していたのです。展示は認識的価値だけでなく、芸術的価値も持っています。企画はとても実りが多く、時宜にかなったものに見えるので、ミュージアムの展示活動においてこの仕事が続くよう、とても望まれます。
Ｈ.ヤグロヴァ、Ｍ.コルシュノヴァ、キリチェンコ

ソビエト期には、社会学の存在自体が疑問視されていた中、あくまでも社会学にこだわり、回転木馬から伝統社会と文化のモデルを抽出しようとしていたレヴィンソンも駆け付けた。

レヴィンソン・アレクセイ・グリゴリエヴィチ、1944年生まれ、高等教育、芸術学修士（演劇芸術史）、芸術学者
展覧会は、祖国のデモクラティクな文化の最重

要な一形式に関するユニークな資料に関する、わが国で最初の学術的収集である。展示の全体容量を見ると、ナロードノエ・グリャーニエの歴史に関するもっとも重要な資料と文書が、十分な根拠ある選択とともに示されていると言える。展示がロシア民衆文化の分野における今後の研究にとっての刺激となるのは疑いえない。博物館アドミニストレーションと学術研究員は、幅広い観客と専門家たちに、これまで、いくつかの例外を除いては、事実上、知られなかった資料を知る機会を与えたことで大きな仕事を行った。学問的、プロパンガンダ的、かつ文化的な価値がきわめて高い、この開始された仕事をミュージアムが継続するように希望したい。

芸術学全ロシア学術研究所・技術倫理部門主任、A.レヴィンソン（**図14**）

展覧会入場者について、残念ながらその数は不明だが、さまざまな分野の人々が訪れたとコネーチヌィは記す。例示として、ソ連邦諸民族民族学ミュージアム、B.マヤコフスキイ・ミュージアム（モスクワ）、フレスコ・ディオニシィ・ミュージアム（フェラポント修道院）、野外ミュージアム（アルハンゲリスク）の学芸員、芸術学者、建築家、文書館員、生科学者、教員、学生、エンジニア、コムソモール労働者、計画編成者、建築技師、大衆祭典演出家、子供を連れた人々、スフミからの給仕頭、タシケントからのトラクター運転手等々と書かれている。

その一方で、展覧会を革命前の祝祭のプロパガンダであるとか、展示品の中に、帝室御用達で作られた復活祭の陶製卵が宗教的テーマを導き出すというような異議申し立ても寄せられた。ソ連崩壊を経験した現在からすれば、笑い話だが、当時は、ミュージアム執行部やさらに上層の文化局の反応を引き起こし、コネーチヌィが呼びだされるという事態が生じたのである[24]。彼によれば「役人たちは、《ナロードノエ・グリャーニエ》に完全に無理解で、まったく受け入れられないことを露わに言明し」、展覧会の中止・解体の怖れが迫った。むろん、それを決めるには特別の委員会が招集されねばならず、展覧会開催のために働いてくれた画家や組立技師も加わらなければならなくなる。コネーチヌィは民族学者や芸術学者たちに呼び掛けることになる。

最初の「援軍」は、前回同様、民族学者のグループである。それは、先に述べた《ペテルブルク-レニングラード民族学》をテーマとする民族学研究所レニングラード支部主催の第二回研究会（1985年３月５～７日）の参加者たちがエクスカーション先に展覧会を選んだのである。しかも、その見学の「総括」を文章化しているのは、やはりコネーチヌィの要請によるものか。

レニングラード市博物館で開催中のナロードノエ・グリャーニエをテーマとした展示は、古きペテルブルクの歴史と習俗、そしてロシア民衆の習俗全体を理解する上できわめて興味深く、重要です。さまざまな保管庫におさめられた実に多彩で興味ある資料を収集し、素晴らしくユニークな展示の準備をした博物館員のどれほど巨大な仕事がこの有益な仕事に込められているのか、思いをこらすことができます。その成果として、色鮮やかで説得力ある展示物によって明らかにされたのは、これまでどの博物館でも展示されたことのない都市習俗の興味ある分野です。この展示会は、今後、博物館展示を行う際に間違いなく役立つものです。これは、現代の社会習俗でますます大きな意味を獲得するナロードノエ・グリャーニエと祝祭を構築することとの関連で実際的な意義も持ちます。学芸員にとっては、ロシア民族文化全体の発展の中での都市民族学、都市文化の役割をめぐる諸問題を解明する上で重要です。展示品の多くは、この展示以前には、専門家でさえもほとんど知られていないものでした。

本展示を準備したA.M.コネーチヌィ氏は、資料を収集したばかりでなく、その資料を分かりやすく、広範なレニングラードの人々とこの町の客たちに理解され、受け入れられるよう巧みな展示手法を使うことができました。

展示カタログを出版すべきですし、どうあれ、ミュージアムの疑いなき功績となるこの展示を記録しておくべきです。

M.Г.ラビノヴィチ、歴史学博士、ソ連邦文化省博物館学術会議メンバー

O.P.ブリナ、歴史学博士候補、科学アカデミー民族学研究所（モスクワ）学術研究員

E.フィリポヴァ、民族学研究所、モスクワ

1985年３月７日

ラビノヴィチは、モスクワの民族学研究所に勤務していたにもかかわらず、《ペテルブルク民族学》研究報告会には第一回から参加・報告をしていた。もともと彼は、モスクワを中心とする考古学・中世文化史を専門としていたが、『ロシア封建都市民族学概論』(1978)[25]の刊行を契機に、当時の「都市民族学」の動きに反応してレニングラードへ来ていたと思われる。研究所東スラヴ民族学部門に所属し、主任チストフの片腕・補佐役であったことも影響があるのだろう。

芸術学者からの支援も大きい。

[24] 展覧会終了後の1985年冬に彼が勤務するミュージアムの年間総括の会議で、展覧会の大成功に対して、館長が「いま一度、卵のコネーチヌィ、おめでとう！」と叫び、皆が私の目を見てそれに唱和したという。

[25] Рабинович М.Г. Очерки этнографии русского феодального города. М., 1978.

ソ連邦文化省・全連邦芸術学研究所・民衆創造部門の学術研究員は《ペテルブルクのナロードノエ・グリャーニエと娯楽　18世紀末～20世紀初頭》展を見ることができました。レンソビエト執行委員会文化局、国立レニングラード史ミュージアム、この展覧会のクリエーターは祖国の文化史研究に大きな貢献を成し遂げたと考えます。

民衆文化の根源、その起源と新しい形式への継承性という問題は、社会主義文化の形成、発展と今後の完全化のもっとも重要な諸問題の一つとしてますます明確に認識されています。

展覧会に対する独自のエピグラフとなるのは、1923、1924年の古きペテルブルクの研究・一般化・芸術的保存協会のポスターです。それは、現在のレニングラードのような文化史的センターの生きた都市文化の伝統保存の重要性が、革命後の最初の十年ですでに意識されていたことを証言しています。

『ソ連邦諸民族の芸術的自立活動の歴史』第一巻の仕事に携わる我ら部門のメンバーは、革命後の現実においてナロードノエ・グリャーニエ伝統の継承の多くの証言を知っています。

現代ならびに未来の祝祭における形式の変化は伝統によらぬわけにはいかず、伝統は全面的に検討し、学問的に意味付けられねばならない。

この極めて複雑で重要な事業で欠かせない部分となったのがこの展覧会である。疑いなく、この展示は、多くの研究者の学問的な仕事、特に我々研究所の仕事の中に何度も反映されるだろう。

祖国文化、祖国の文化的真珠であるレニングラードに対する献身的な研究者であり、レニングラード歴史博物館の上級研究員であるアルビン・ミハイロヴィチ・コネーチヌィには、特に熱い感謝の気持ちを捧げたい。彼は、市史ミュージアムの指導的な部門による大きな仕事である展覧会について一時間以上をかけて、とても詳細に語ってくれました。改めて、この思慮深く、限りない知識を有する彼に感謝します。

部門長、教授、Л.П.ソーンツェヴァ
芸術学博士候補　А.Л.ソコロフスカヤ、К.Г.ボゲムスカヤ、С.Ю.ルミャンツェフ
部門学術秘書　В.Н.マクシーモフ

「芸術的自立活動」は、革命前から引き継がれた各共同体の伝統文化・芸術とその「ソビエト化」を考える上でのキーワードである。過去の伝統といかに「折り合い」をつけ、「継承」かつ「展開」させるかが問われるからである。「1923、1924年の古きペテルブルクの研究・一般化・芸術的保存協会」が前述の「古きペテルブルク」協会とイコールかは、現時点で不明である。

展覧会は1985年４月２日に閉幕する。反響の中にあった、常設展示やカタログ出版の希望はかなえられなかったものの、展覧会の開催はその後の民衆文化史研究全体と、コネーチヌィ自身の仕事の中で確実に反映されることになる[26]。展覧会直後の動きを示す事例をあげると、1985年11月27～29日に「学者の家」で開催されたコンフェランス「余暇、遊戯と人格の調和的発達」においてコネーチヌィは「19世紀ペテルブルクの広場の民衆的祝祭における遊戯的見世物・娯楽の形」と題する報告を行った。同じ場では、先に言及した社会学者のレヴァダ（1930－2006）が「社会行動のシステムにおける遊戯的構造」をテーマとする報告を行っている。さらに、1986年12月には、К.С.スタニスラフスキィ記念芸術家宮殿で研究者の「夕べ」が開催されたが、これは（1）ペテルブルク広場の民衆娯楽（コネーチヌィの話）、（2）町の音楽・歌謡フォークロア（レニングラード・カメラ・フォークロアアンサンブルが出演）の二部門からなっていた。すでに、ペレストロイカの大きな歴史のうねりがまさに眼前に迫っていた。

Ⅵ. むすび

以上のことから分かるのは、ソビエト末期の1980年代初めに開始されたコネーチヌィによるグリャーニエ研究が、それまでまったく未開拓な分野における最初の成果であったことである。グリャーニエを含む革命前のペテルブルクにおける娯楽・見世物・祝祭全体へのパースペクティヴを示唆する習俗史＝誌研究の重要なステップであったことも明白である。しかも、コネーチヌィの仕事が、むろんグリャーニエ研究そのものでは最初であったとしても、よりマクロに見た時、1920年代半ばまでかろうじて生き延びたペテルブルク文化史研究、ほぼ同時期に活躍したロシア・フォルマリストたちの習俗быт（史）への関心という二つの動きを継承し、発展させたものであることに関しては、すでに別稿で述べた[27]。

1984年の《ナロードノエ・グリャーニエ》展が同時代のソビエト・アカデミズムならびに社会に大きなインパクトを残したことは明らかである。特に、展覧会に対する「反響」の諸相については、上であげた多くの証言が十分に示している。民族学者、文献学者、演劇・映画人、芸術（史）研究者等々が敏感に反応していることに注目すべきである。民族学が農村調査を主要なフィールドとして、その限りで「現在文化」をテクストとする（むろん、そこに過去を聴き・読みとるはずだが）との立場からすれば、「都市の過去の文化」を対象とするのは「危険」であるかもしれない。それ

[26] 上の注３にあげた、彼の文化史研究の意義を記した拙稿と彼の著作目録を参照。
[27] 同上。

は、本来的には狭義の歴史学者の仕事ではないか、との問いかけがあってもおかしくない。しかし、例えば、先に触れた「中世ロシア都市のエスノグラフィ」を指向していたラビノヴィチをはじめとして、この時期の民族学研究所には新たな「都市史」、そして「習俗史」への関心が芽生えていたことは間違いない。さらに、同時代の首都モスクワに対して、過去の首都＝帝都ペテルブルクの文化を民族学・歴史学、さらには関連する隣接分野からの統合的なアプローチによって解明していこうとする動きが、当時のレニングラードの一部の人々の間には確実に存在していた。コネーチヌィの祝祭研究は、そうした人びとの強く、執拗な支援の輪と連携によるところが大きかったことを忘れてはならない。

現在、ロシア社会は未曾有の「大衆社会」「遊戯・娯楽社会」を経験しつつあるかに見える。それを反映するかのように、書店の本棚には、娯楽・レジャーのマニュアル本や観光案内書に並んで、娯楽・遊戯の歴史や習俗史関連の書物が多数置かれている[28]。ソビエト崩壊後に研究の最前線となった《文化学》をベースとして、メディア論、コミュニケーション研究、そして日常史＝誌は今や「花盛り」である。日常それ自体が「肯定される」時代が到来し、かつての「キーワード」である“祝祭”も“レジャー”も“習俗”も、今やすっかり古びてしまった感がある。ロシア社会の現実がそれらのコトバを乗り越え、「陳腐化」させてしまったとすれば、われわれはさらにその日常を研究対象とするであろう。

かつて、周囲の支援やアカデミズムの権威を最初から期待することなく、ほぼ単独で、対象に対する自らの知的好奇心と見識に忠実に調査を敢行させた一人の研究者の姿勢と成果に、われわれは多くを学び続けなければならない。

（2016年10月31日受理）

図1　ネヴァ川氷上　ハイスラー　1790年代

図2　1982年6月　左からレヴィンソンとコネーチヌィ　レニングラードで

図3　グリャーニエ模型　アレクセエフ＝ヤコヴレフ（1932年　ジダノフスキイ撮影）

[28] ソビエト期の遊戯・娯楽（史）研究に関しては、今後もていねいなフィードバックが求められる。例えば、「見世物芸術の社会学」を提唱したH.A. フレノフ、あるいはH.M. ゾールカヤの仕事なども含めて再考すべき部分は多い。ただし、それらを「大衆文化研究」として一括りにする現状の大勢（Лебедева В.Г. Судьбы массовой культуры России. Вторая половина XIX-XX первая треть века. СПб., 2007. ちなみに、ここにはコネーチヌィの仕事の言及はない）には多くの問題が残る。さらに、現在のロシア遊戯・娯楽研究に関しては、とりあえず、上の注3にあげた拙稿（2016）p.174、注31を参照のこと。

図 4　1984 年 11 月開催「グリャーニエ」展ポスター

図 7　広場のラヨーク　1857 年

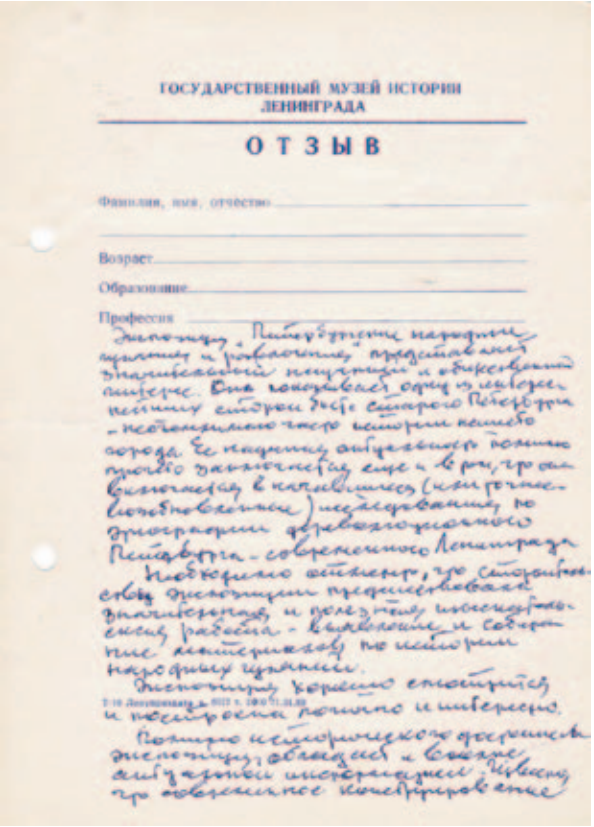
図 8　第二ホール

図 5　「丘」（滑り台）マルクース　1804 年

図 9　レイフェルト劇場　1891 年

図 6　海軍省広場　ベグロフ　1835 年

図 10　第四ホール


ГОСУДАРСТВЕННЫЙ МУЗЕЙ ИСТОРИИ ЛЕНИНГРАДА

ОТЗЫВ

Фамилия, имя, отчество

Возраст

Образование

Профессия

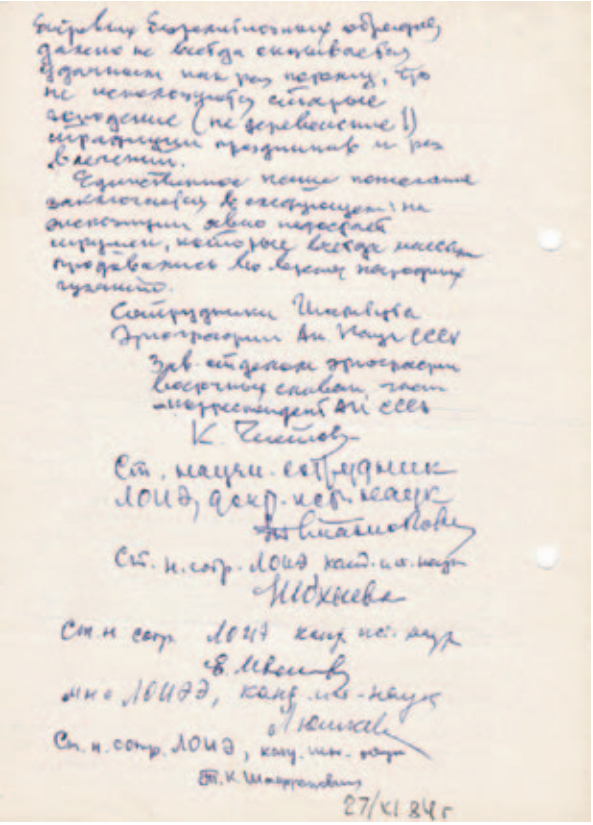
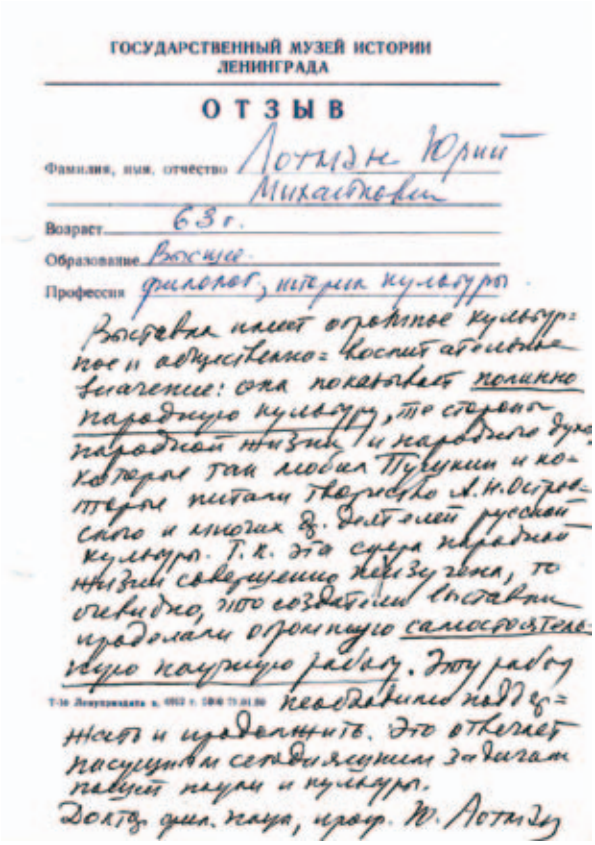


図 11—12　展覧会所見　チストフ他


ГОСУДАРСТВЕННЫЙ МУЗЕЙ ИСТОРИИ ЛЕНИНГРАДА

ОТЗЫВ

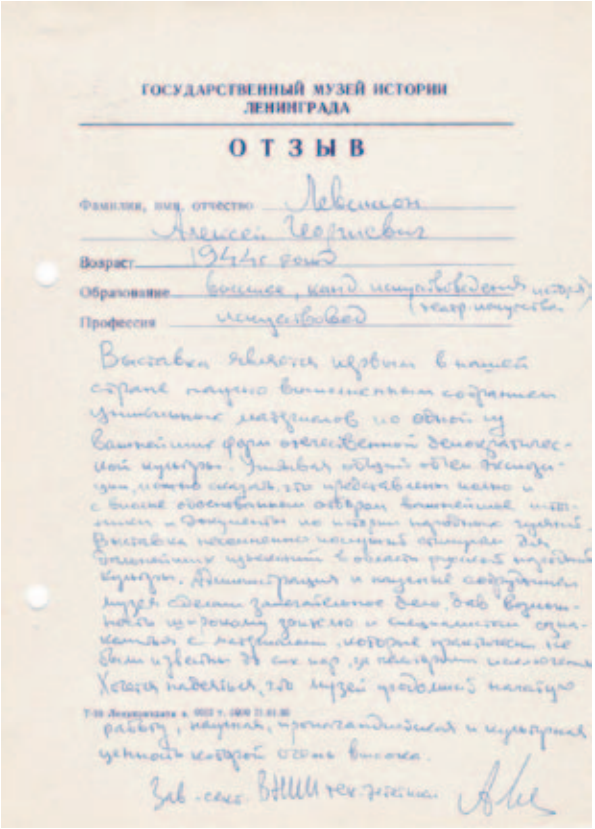
Фамилия, имя, отчество Лотман Юрий Михайлович

Возраст 63 г.

Образование высшее

Профессия филолог, историк культуры

図 13　展覧会所見　ロトマン


ГОСУДАРСТВЕННЫЙ МУЗЕЙ ИСТОРИИ ЛЕНИНГРАДА

ОТЗЫВ

Фамилия, имя, отчество Левинсон Алексей Чеславович

Возраст 1944 г. рожд.

Образование высшее, канд. искусствоведения

Профессия искусствовед

図 14　展覧会所見　レヴィンソン